琉球大学学術リポジトリ

音楽ホール・芸術・地域の動態創造に関する研究　―佐敷町・シュガーホールを題材として―

メタデータ	言語: 出版者: 中村透 公開日: 2021-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 透, Nakamura, Toru メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5387

序論

♦研究の目的と意義

この研究の目的は、沖縄県・佐敷町（現南城市）の佐敷町文化センター・シュガーホール（以下シュガーホール）を題材にして、音楽ホールと芸術と地域の人々の音楽活動との関係を詳述し、今後のホールとコミュニティのひとつのありかたへの指針を示すものである。

シュガーホールは、1994年6月に沖縄県島尻郡佐敷町に設置された佐敷町立の音楽ホールで、沖縄県では最初に開館された公立の目的型文化施設であった。折しも沖縄は本土復帰後22年を経て、政治、経済、マス・メディア文化等の面で急速に本土に系列下していった時代にあたる。佐敷町という小さな町に、沖縄県初の音楽ホールが設置されるというニュースは、佐敷町民だけでなく、沖縄県民にも大きなインパクトを与えた。とくに伝統芸能を日常のさまざまなシーンで展開する沖縄の人々にとっては、伝統音楽が音楽に専用化された表現の場へ移行することで、より専門化・芸術化した文化に成長しうるという期待を抱かせるものであった。また、クラシック音楽の演奏家・愛好家と吹奏楽・合唱の指導にあたる学校音楽の関係者にとっては、音楽活動の場がようやく“本土並み”になるのだという感慨を抱かせた。

筆者は、シュガーホール開館の一年前である1993年4月から、佐敷町文化センター建設委員会の一委員としてシュガーホールの設立準備に関わり、翌1994年6月のホール開館時に非常勤の芸術監督として招聘された。以降2006年3月まで、佐敷町職員、ホールスタッフ及び町民関係者とともに、ホールの各種事業の企画立案とその実行に直接従事してきたのである。

したがって本研究は、一地方自治体が設置した公立文化施設としての音楽ホールに、内部から関わった者の実践にもとづく執筆である。わが国の地方にある音楽ホールのうちの一つのモデル・ケースとして、ホールと地域の人々の関係で起きたことを公開し、もって外部価値を得ようとするものである。

♦問題の所在

1980年代以降顕著になった地方の音楽ホールの設置動向は、1970年代からの公共文

化施設建設ラッシュの延長線上にあり、一部の地方自治体が文化行政における個性化や独自性をはかるために“目的型文化施設”の建設路線をとったことによる。当初コミュニティ・センターとして構想された佐敷町文化センターが、後に音楽ホールへと転換したのも同様の路線に乗ったものであった。しかし、行政主導、あるいは首長先導型による音楽ホールの設置は、地域の市民社会と音楽芸術の創造的な関係を目指すという面からは、設置当初からいくつかの問題要因を孕んでいた。

その問題要因は、第一に音楽ホールがその地域の音楽文化の様態をどのようにとらえ、また未来に向かってどのような音楽文化を地域社会に構築するかのデザインが必ずしも明確に描かれていなかったこと、第二に音楽ホールが西洋クラシック音楽を専ら対象とする専用施設であるとしたこと、第三に地域のホールでありながら、地域の多様な領域の音楽家–演奏家、音楽教育者、音楽愛好家–や市民との協働によるホール運営・音楽プログラム実践への視点が乏しかったこと、第四に以上の結果、中央からの音楽家派遣受け入れ施設に偏る傾向をもち、地域の人々は音楽サービスを受容するだけの“顧客”“消費者”になりがちであったこと、等である。

公共の施設として、あるいは公の財を用いて事業を行う施設として音楽ホールが地域の音楽文化に果たす役割は大きい。しかし、上記から生じ得る問題が、仮に地域の音楽文化に負の影響を与え、その結果音楽ホールの存在価値を疑わせることになるとすれば、ホールそのものの存在意義だけでなく、地域社会における人びとと音楽芸術との関係を不毛なものにしかねない。地方の自治体に音楽ホールが設置されるようになって30年弱を経た今日でも、筆者の見聞するところでは、地方の音楽ホールが地域の音楽文化に貢献する方向性は未だ明確に見えてはいないように思われる。

◆研究の方法

第1章は佐敷町の歴史文献、佐敷町文化センター・シュガーホールの内部資料及び筆者の記録と追加的インタビュー調査にもとづいて歴史的な記述を行う。第2章は、シュガーホールにある内部資料、公演記録および関係者の証言と、実践現場での筆者の体験にもとづいて、ホールで実践された事業の実態を分析的に記述する。また、各種の音楽事業を、その目的に沿って類型的な分類を試みる。第3章、第4章では、わが国の公共文化施設における市民と芸術家の音楽受容・参加に関する問題を、芸術学、文化行政学における先行研究を参考にしながら論じる。とくに一般市民に対して音楽

ホールがはたす役割を体系的に整理し、その具体的方法と理論的根拠とを提示する。

◆論文の構成

本論文は序論と本文4章、及び結論から成る。なお巻末に「佐敷町文化センター運営審議会設置要綱」（資料 1)、「佐敷町文化センターの設置及び管理に関する条例」（資料2)、「佐敷町文化センター・シュガーホールの実施事業一覧　1994年-2006年」（資料3）を添付する。

第1章　　佐敷町とシュガーホール

佐敷町の歴史・文化を概観し、佐敷町のコミュニティの成立条件と文化的アイデンティティについて記述する。またそれらを基盤にして構想された文化センターが、音楽ホールの設置へと方向転換した過程を明らかにする。

第2章　　シュガーホールと音楽事業

本章では、ホールスタッフ・文化センター運営審議会によって計画されたシュガーホールの開館記念音楽事業が、結果的に町民とシュガーホールの間にどのような問題を生じさせたのかを明らかにする。その問題解決のために、筆者・ホールスタッフ・運営審議会によって見直された開館2年目以降の音楽事業の内容と、再構築された文化事業政策の理念を詳述する。

第3章　地域の動態創造に果たす音楽ホールの役割

シュガーホールの実施事業の経過と結果を考察し、一般的な視野から音楽ホールにおける音楽芸術、芸術家と市民、コミュニティとの動態創造を考察する。具体的には、アーティストとコミュニティ成員の協働関係、市民の音楽協働における主体性の維持と創造性の関係、異文化接触による音楽の「文化触変」等からの視点である。

第4章　音楽ホールがはたす芸術概念の拡大

第3章までの実践報告と論考を踏まえ、今後の地方の音楽ホールにおける実践のあり方とその理論的根拠を、先行研究と照らし合わせながら総括的に提案する。地方の音楽ホールが、地域の生活空間や市民社会に新しい芸術概念の拡大をもたらす装置として作動できることを提起する。

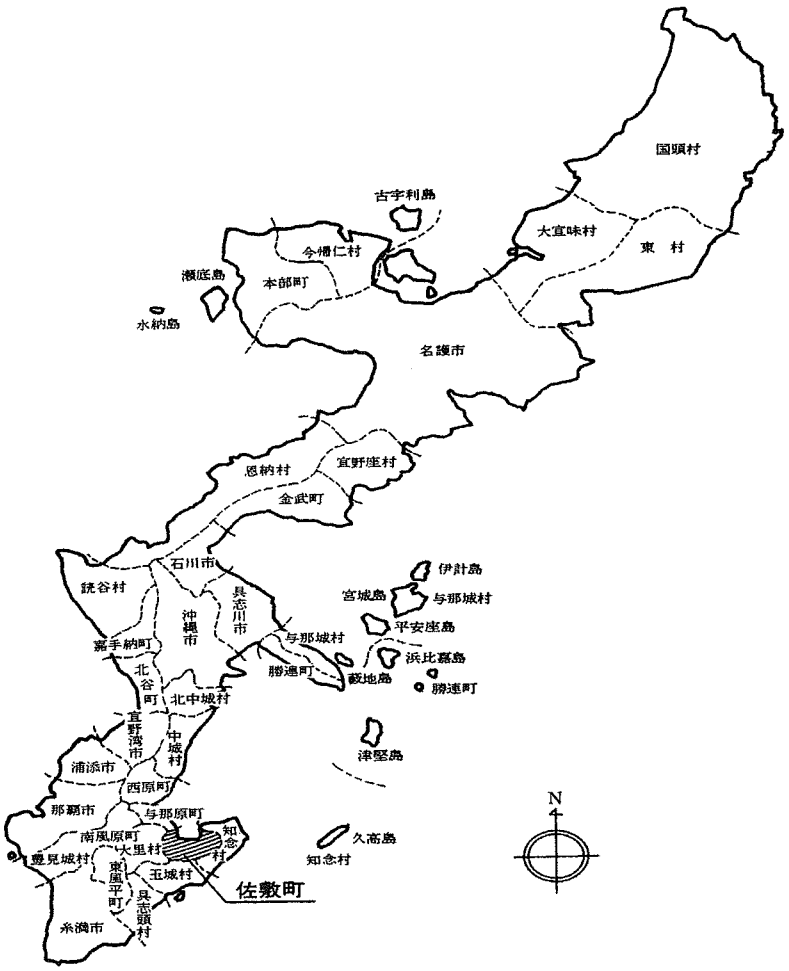
結論　地域の音楽ホールの役割

第1章から第4章までの内容をまとめた後、本研究全体から抽出された課題と実践結果とにもとづき、今後の地方の音楽ホールが音楽芸術に果たすべき役割を提起する。

◆佐敷町について

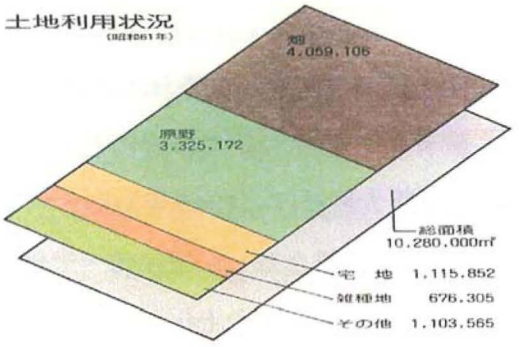
佐敷町（現南城市佐敷）は沖縄本島南部の東側に位置し、那覇市から 16 kmの距離にある。東に知念村、西に大里村、与那原町、南に玉城村と隣接し、北側は中城湾に面している。南側の後背地は、東の宿納森から西の大里城址へと丘陵をなし、緑の屏風のように町を三日月状に囲んでいる（図 1-1）。総面積は 10.28 平方kmで、そのおよそ七割を畑地と原野（ほぼ後背地の緑地帯）が占めている。畑地はジャーガル土壌と呼ばれる沖縄に固有の良質の土壌で、また丘陵や海岸には亜熱帯特有の生物自然が豊かである。図 1-1 は、沖縄本島における佐敷町の位置図で、図 1-2 は、佐敷町の 1986 年当時の土地利用状況である。

図 1-1　佐敷町の位置図



（『佐敷町史』1984:20）

図 1-2　佐敷町土地利用状況（昭和 61 年現在）



（『佐敷町町勢要覧’87』1987:39）

人口は、1950 年の 7,963 人から年々微増し、シュガーホールが設置された 1994 年の人口は 11,108 人であった。同年の産業別就労人口は、第一次産業 11.2%、第二次産業 22.9%、第三次産業 65.8%で、年度誤差はあるが土地利用状況に比べて第三次産業従事者の比率が高い。町内には行政区としての区（あるいは字）が 1994 年時点で 16 あり、古い区（字）で自治的なコミュニティの能力を維持するところと、新しい区で行政代執行を行うだけのところとがある。公立の幼稚園１、小学校２、中学校１があり、高等学校以上の学校はない。県庁所在地の那覇市までは、路線バスで 40 分程を要し、学生・老人以外は殆どが自家用車で那覇市との間を往来する。詳しい調査はないが、第二次・三次産業就労者の大多数は町外への通勤者である。

シュガーホールができるまで、佐敷町には町民全体を対象とした公立文化施設は存在しなかった。それまでは各区にある公民館、あるいはそれに代わる集会施設が、区ごとの行事に用いられていた。町全体の文化行事には、学校体育館、老人福祉センターが代用されていたのである。町民全体の文化施設をもつことは、佐敷の人々にとって一種の悲願でもあり、その願いは戦後の佐敷村復興時代から潜在し、1980 年の町制移行後に一気に顕在化した。

しかし、決して豊かとはいえない町財政の中で巨費を投じて文化施設を建設することには、行政の内と外の両方でさまざまな議論が起り、決定までに紆余曲折があった。

なお佐敷町は、2006 年 1 月に近隣三村と合併して南城市に併合された。本論の研究対象は、筆者が芸術監督として在任した合併以前の佐敷町時代に特定した。